

福崎町文化

第24号 平成20年3月31日 兵庫県神崎郡福崎町福田176の1 福崎町文化センター発行



銀の馬車道
『辻川界限・大庄屋三木家』

クロモジとズズダマ

―柳田学ロマンの源泉―

広島女学院大学 小山 清



一

兵庫県神崎郡福崎町の名誉町民柳田国男は、明治八年七月三十一日、兵庫県神東（じんとう）郡辻川村に生まれている。この辻川村は、柳田国男の生まれた翌年の明治九年に、西田原村と改称され、さらに明治二十二年の市制町村制施行によって、西田原村・東田原村・南田原村の三村が合併して田原（たわら）村となった。したがって、多くの「年譜」が、その生地を、田原村辻川としているのは、精確とはいえない。

柳田国男の生まれた松岡家は、辻川村（のち西田原村大字辻川）を、東西に貫く北条・山崎街道筋に沿った八十戸ほどの細長い集落の西のほうに位置していた。当時、まだ市

川に橋が架けられていなくて、渡し舟が対岸とを結んでいたが、東の丘から西の船着場へ下りてくる路の両側に並んだ集落のうち、柳田国男の生家のある北側の屋敷は、表の広庭が道路の拡張で削り取られていたため、窮屈な感じがしていた。

柳田国男の生家は、現在、鈴の森神社の境内に移転復元され、福崎町によって管理されているが、明治十七年に、一家が加西郡北条町に移転するに先立って売り払われ、北条へ行く道のカケアガリという所に長く移されていた。柳田国男が「北国紀行」に、「自分の生れし家は、カケアガリといふ坂の上に引移されて屋根みゆ。」と語っているように、買い主によって熊野神社の向こう側に移築されていたのである。

最晩年の口述筆記である、『故郷七十年』にあっても、柳田国男は、「私は帰郷しても山の上からはかにその屋根だけを眺めて、昔をしのぶに留めている。」と回想している。

生まれてから十歳までを暮らしたわが家を、山の上から遠く屋根だけ眺めて、昔を偲ぶに留めているのは、悔しさをやうしろめたさや気恥ずかしさが突き上げてきて、近寄って自分の幼時の体臭を嗅いでみたいという衝動を抑制したのであろう。

もともと柳田国男の生家は、柳田国男の生まれる前年の、祖母小鶴が亡くなった翌年の明治七年に、辻川村から北へ十二キロほど行った、生野街道のかたわらの栗賀村か福本村か辺りにあった、老人夫婦だけの家を買ってきて、三木家の借地に建てたものであった。百五十年ほどの間に三度も移築され、現在もなお往時の姿をそのままに残している民家は数少なく、数奇な運命に巡り会ってきたと言えるべきである。

二

柳田国男が「日本一小きな家」と呼んだ、生家の間取りは、『故郷七十年』の中に、「数字でいふと座敷が四畳半、間に唐紙があつて隣りが四畳半の納戸、横に三畳づつの二間があり、片方の入り口の三畳を玄関

といひ、他の三畳の台所を茶の間と呼んでいた。」と書かれている。この「田の字型」の間取りは、日本の

農村のどこでも見られたものであり、一組の夫婦と子供とが居住するには、必ずしも狭くはなかった。

四つの部屋のうち、国男少年がどの部屋を寝室にしていたかは、定かにされていないが、毎朝、厨の方から伝わってくるパチパチという木の燃える音と、それに伴って漂ってくる芳しい匂いによつて目を覚ますのを常にしてきた。その音と匂いと正体は、「母が朝飯のかまどの下に、炭俵の口にあたつてゐた小枝の束を少しづつ、折つては燃し付けにしてゐるのが、私の枕下に伝はつたのであつた。」と明かされている。

炭俵の口には、細い光沢のある小枝を曲げて輪にして当ててある場合が多いが、そのころ国男少年の家では、わざわざ山に柴木を採ることをしないで、炭俵の口の小枝を残しておき毎朝用いていたのである。柳田国男は、その木がいったい何という名であるかを、長い間知らないでいたが、後年になって、たまたまふと嗅ぎとめた焚き火の匂いから、クロモジの木（鳥柴の木）であつたことに気づいたというのである。

それにしても、柳田国男の幼少時代の体験は、このクロモジが典型であるように、音と匂いとに密接にか



が、土地で鳥子柴と呼んでいるクロモジであったからである。

柳田国男は、『炭焼日記』の昭和二十年十月二十五日に、「『鳥柴考』を書きなほす、小紙で三千二三枚。」とするしているが、昭和二十二年の「花とイナウ」を皮切りにして、クロモジに関する論文を数多く発表している。この時期、クロモジに執拗なまでの関心を寄せたわけを説明するのが、「鳥柴考要領」の「日本人が南来の種類であったことが、是からも段々と推測せられて来るのではないか」という一節である。

かわっている。例えば、匂いについて言えば、亥の子の日、うるち米の粉で作った餅を、互いの家で贈答すること、を、「私の家などでもよく此の亥の子餅を貰った。菊の花のや、うつろになつた小枝を、必ず重箱の中に入れてあり、蓋をとると、プーンとよい香りがしたものであつた。」と印象的に回想している。

ところで、クロモジの木は、高さ二メートルばかりの、クスノキ科の落葉灌木で、樹皮には黒斑があり、香気を含んだ材は、楊枝や箸に利用されるが、神に捧げる祭木としても知られている。柳田国男がこのクロモジの木を認識したのは、昭和十八年五月の東北旅行で、秋田県仙北郡角館町を訪れたときであり、旧武家屋敷が軒並みに結い渡している柴垣

の問題にまで導かれていったのである。」と語っている。鳥柴の木ともクロモジとも呼ばれる、神に捧げる祭木によって、はるか南の故郷から鳥伝いに日本本土に移り住んだという「海上の道」を想定し、日本人の祖先がどこから来たかという畢生の課題に取り組んだのであつた。

三

柳田国男の生家は、西田原村大字辻川を東西に貫く街道に沿って発達した集落の、西のはずれに位置していたが、その横手を、「上坂（うえざか）」と呼ぶ細道が、一本北へ向かって抜けていた。後年、三歳になる末弟輝夫が志願して、筋向かいの豆腐屋へ油揚げを買いに行ったところ、帰ってきたのを見ると、その端が少し嚙られており、「上坂」の方から走ってきたネズミの所為にしたエピソードが知られている。

この細道を一町ほど北へ登っていると、安産の神として知られた、鎮守の鈴の森神社へ通じており、それは、『播磨鑑』に、「播磨ノ神々集會之所也」としてされている、古くからの名所であつた。いかにもこぢまんまりしていたが、正面の十段ばかりの石段を上がると、わずかな境内

に「こまいぬ」が向き合い、「やまもも」の古木が茂り、「うぶすなの森の山も、こま狗はなつかしきかな物いはねども」と詠んでいる。

「上坂」を隔てたすぐ西隣の田んぼのほとりに、「ズズダマ」が三四株自生しており、毎年この実が熟すると、幼友だちの「ワキヤン」と採りに行き、草履を泥だらけにしては母に叱られたのであつた。子どもたちがジズダマ（数珠玉）と呼んでいた草の実を、熱心に採りに行くのは、光沢のある実を糸に通して遊ぶためであつたが、長く二重にも三重にもわがねて、首から帯の辺りまで垂らして興じたのである。

少年のころのたわいもないズズダマの遊びを、柳田国男が生涯を通じて長く記憶することになった、もう一つの因縁は、九歳のころ顔から手足にかけて一面にいぼができて、どうにも放っておけないことがあつたからである。そのとき、漢方の心得のあつた父が生葉屋に宛てて「薏苡仁（よくいじん）」と書き、「これは、おまへたちが毎年採ってくるジズ玉の皮を取つたものなのだ。」と教えてくれたのであつた。

ところで、子どものころ首から長く垂らして遊んだ、「ズズダマ」を

テーマにして、昭和二十八年、自然史学会の紀要に発表された「人とズズダマ」は、最晩年の大作『海上の道』に収録された。「ヨブの涙といふ珍しい名をもつたこの草の実は、日本では千年以上の存在が照明せられて居る。私は殊に因縁があつて幼少の頃から幾度と無く、是に興味を引かれ、又不審を抱いて来た記憶を持つ。」と書き出されている。

柳田国男は、「人とズズダマ」の趣意を、「微々たる或一つの植物の分布存続でも、縁あつてもし仔細に考察することが許されるならば、そこになほ人類発展の大きな理法を、見出すことが出来るかもしれない、といふことが私は説いて見たかったのである。」と述べている。「人類発展の大きな理法」は、ズズダマをしのぐ宝貝の魅力にまで発展して、

漂着の背後に計画的な渡航が控えていたことを見定めている。

「人とズズダマ」を含めて、八編の論考と一編の報告とを収録した『海上の道』は、日本人がどのような経路をたどつて、日本列島に来たのかということテーマに掲げ、壮大な仮説を提示したのであつた。その仮説は、必ずしも全学会の認めるところとはならなかつたが、日本人の先祖がはるか南の、中国大陸南部から沖縄の島々に渡り、島伝いに日本本土に移り住んだという『海上の道』を想定していたのであつた。

「海上の道」は、「や、奇矯に失した私の民族起源論が殆ど完膚なく撃破せられるやうな日が来るならば、それこそは我々の学問の新しい展開である。」と結ばれている。柳田国男が想定したような稲作の文化ではないにしても、南島を南から北へ移動した文化の存在を推定し得る限り、今後、日本人の起源をめぐる探求にあつて、『海上の道』は、常に新鮮な問題を提起する学説として、存在し続けるにちがいない。

四

人はだれしも、幼少年時代の体験をもつて、無意識的に人間形成を成

し遂げているのであるが、柳田国男の場合は、その体験の大半が意識化され、学問的な体系に位置づけられた点において特異である。しかも、それらは、きわめて豊富でかつ多彩であり、民俗学をはじめとして、国語学（方言論）・教育学（国語教育論）を考究していくに際して、いつでも取り出せる、感動を伴つた資料を提供し続けたのであつた。

膨大な文献を駆使し、全国にまたがる旅行の見聞を活用する中で、終始確固とした資料として重用したのが、幼少年時の体験であつた。先に引いた辻川時代のクロモジヤズズダマが、日本人の移住を説明する重大な手がかりになり得たように、感動を伴つたイメージ豊かな幼少年時の体験は、五十にも百にも達し、こればかりはほかのだれもが真似をすることができない、天性の資質から導き出された才能であつた。

柳田国男が終生、日本人の固有信仰に深い関心を寄せ、とりわけ晩年にあつて、氏神の研究に心血を注いだのは、ひとえに子どもころの一日が一日遊んでいたうぶすなの森に、その原点を有していた。氏神様が鎮座する集落に生まれた国男少年は、暇さえあればお宮に来て遊んでいた

のである。柳田国男が幼心に発した疑問に執着する探求心は、クロモジにしてもズズダマにしても、驚くばかりの持続性を伴つていた。

もっと言えば、少年のころに生地辻川で試みた、いくつもの遊びを回想しているが、オオバコの葉をよく揉んで糸の先に結び、田の中を持ち歩いて蛙を釣り上げて遊んだのは、生家から鈴の森神社へ至る、「上坂」の辺りであつたらうか。親になつてからも、散歩の途中、子どもたちの前で演じており、「上手に竿をはねると、二丈三丈の青空まで、蛙が跳び上がつて、遠くの田へ落ちることがある。」と、披露している。

柳田国男の生地、兵庫県神東郡辻川村（現神崎郡福崎町辻川）は、播磨国の中心地姫路市から市川の流れを北に十五キロばかり遡つた所であるが、柳田国男ほど自分の幼少年時の体験を生き生きと語つた人はいないであろう。人はだれしも幼少年時の体験を、人生の奥底にしまつて生きていくが、故郷との結びつきの異常な深さと、それが学問というかたちをとつて表れている点とで、柳田国男の場合は異例なのである。

（平成20年1月10日稿）

